

チャのカンザワハダニ

1 形態と生態

- (1)雌成虫は体長 0.53mm 程度で、夏型はくすんだ赤色、休眠型は鮮やかな朱色を呈します。雄成虫は体長 0.45mm 程度です。
- (2)卵から幼虫となり、第1若虫、第2若虫を経て成虫になります。
- (3)卵から成虫になるまで約10日～40日かかり、気温が高いと短くなります。極端な低温、高温は増殖を抑制します。
- (4)越冬した雌成虫は2月から産卵を開始し、3月から幼虫がふ化します。
- (5)11月になるとハダニは徐々に休眠状態になり薬剤の効果が低下します。
- (6)冬期～早春期には茶園の裾部や茶うねの南側・西側の日がよくあたる場所などに集まり、越冬します。

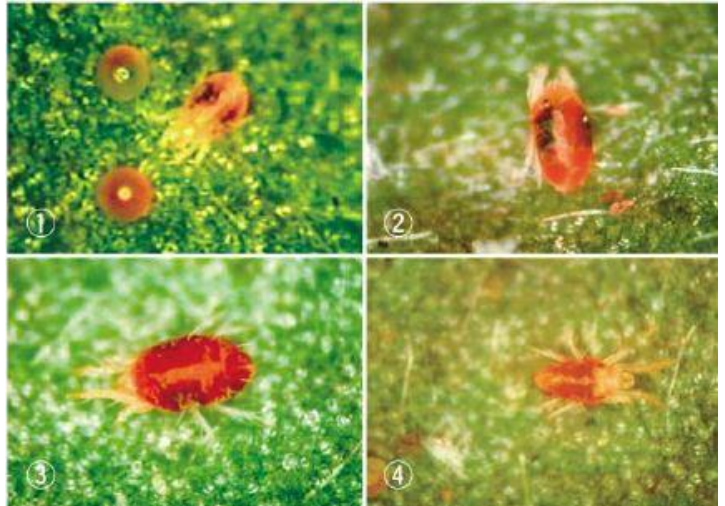


写真1 カンザワハダニの形態

- ①卵(0.13mm)と幼虫(0.21mm)、②若虫(0.33mm)、③雌成虫(0.53mm)、④雄成虫(0.45mm)

2 被害の様子

- (1)通常、茶葉の裏面に生息し、加害(刺害)します。
- (2)古葉(または成葉)が加害されると葉裏はくぼんで褐変し、葉表は黄色く退色します。
- (3)新芽の葉が加害されると著しくくぼみ、葉表は黄化します。加害が進むと、褐変して奇形葉となり、さらに葉の一部が黒変します。
- (4)被害茶園の収量は著しく低下し、製茶品質の低下を招くことがあります。



写真2 カンザワハダニによる新芽加害の様子

- 左:葉表 黄化、褐変、黒化が見られる。
右:葉裏 ハダニ寄生部位はくぼみ、奇形葉となる。



写真3 晩霜後にハダニが多発した茶園
(茶業研究所内、平成16年5月13日撮影)

3 発生について

(1)発生条件

- ア 暖冬の場合、発生が多くなる傾向にあります。
- イ 温暖少雨に経過すると発生が助長されます。
- ウ 晩霜害や強風害後に多発することがあります。
- エ 合成ピレスロイド剤等の連用により、急激に多発することがあります(リサージェンスという)。

(2)発生消長

- ア 5月中旬～下旬が生息密度のピークになります。
- イ 7月に減少して終息、8月下旬以降の秋季に再び増加します。
- ウ 年により夏季の8月上旬に多発することもあります。
- エ 11月になるとハダニは徐々に休眠状態になり、鮮やかな朱色を呈するようになります。
- オ 果樹園等の他の作物における発生消長とはやや異なります。

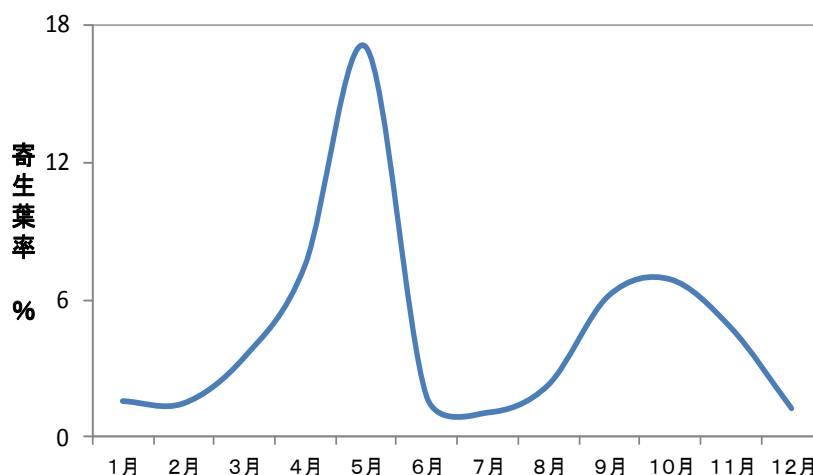


図1 カンザワハダニの発生消長

4 防除時期と防除方法

- (1)一番茶萌芽期における要防除水準の判定：古葉のカンザワハダニ寄生葉率を調査します。一番茶萌芽期において、寄生葉率が20%以下の時は防除を省略することができます。
- (2)本県における一番茶期の主要なハダニの天敵はハダニアザミウマであり、本種に影響の少ない薬剤を選択して使用します。ケナガカブリダニは少なく、6月以降ミヤコカブリダニやニセラーゴカブリダニが見られます。
- (3)防除時期は、3月中旬～下旬(春整枝時期)、4月中旬(一番茶萌芽期)、6月上旬(一番茶摘採後)、8月下旬～9月、10月～11月であり、発生状況に応じて防除の要否を判断します。
- (4)越冬後のカンザワハダニが3月中旬～下旬にしばしば多発することがあり、植物防疫法に基づく注意報がこの時期にしばしば発令されます。この場合は春整枝の前に防除対策を実施すると効果が高まります。
- (5)薬剤散布を実施する場合は、散布液量を成木園で10a当たり400ℓを標準とします。

薬剤防除を実施する場合は、

- 最終有効年月内の農薬を使用し、ラベルに記載されている適用作物、使用時期、使用方法等を必ず確認してください。
- 適切な薬剤を選択し、病害虫が抵抗性を獲得しないように、同一系統薬剤の連続使用を避けてください。
- 農薬を散布する際は飛散しないよう対策を講じてください。

■ 発行 平成28年2月 埼玉県農産物安全課、一般社団法人埼玉県植物防疫協会

■ 問合せ先(原稿執筆)

埼玉県茶業研究所栽培担当(TEL04-2936-1351、県病害虫防除所 TEL048-539-0661)